あくまでもクリスチャン　デーモンシップ

小野　大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あくまでもクリスチャン　デーモンシップ

【Ｎコード】
Ｎ４５２２ＢＡ

【作者名】
小野　大介

【あらすじ】
見習い神父の少年（クリス）は、魔界の大公爵（ルシェルファウスト）のいつもの気まぐれで、盗んだクルーザーで大海原に繰り出すことになってしまった。が、ガス欠になり、陸地に帰れなくなってしまう。動かない船で海上を漂っていると、突然の濃霧が発生し、その彼方から古びた帆船が現れた。それは幽霊船だった……。

プロローグ（前書き）

この小説は、【文芸社】から出版している
【あくまでもクリスチャン】のサイドストーリーです。
読み切りの中編小説です。
宣伝になって申し訳ありません。

この小説は数年前に執筆したもので、
それから添削しておらず、文章や文法など、
至らないところが多々あると思いますが、
その際にはご感想に、
「ここ、おかしいんじゃないか！？」
「もっとちゃんと書けよ！」
「宣伝してんじゃねぇよ！」
「本を買いましたぁ！」
とか、ご意見・ご指摘を頂けましたら幸いです。
特に、最後のお言葉が頂けると嬉しいです。
……すみません。

ゴホンッ！（咳ばらい）

でっ、では、本編をどうぞぉ～。

プロローグ

「美しい三日月だね」
マークは、黄金色に染められたシャンパングラスを通し、満天の星空に輝く鋭利な月を眺めていた。
「けれど、キミの美しさには敵わないな」
二つのシャンパングラスが音を鳴らす。
マークの隣には、亜麻色の髪に小麦色な肌をした美しい女性――シンディの姿があった。手にシャンパングラスを持ち、二人は肩を寄せ合い、夜空を眺めている。
マークの言葉に、シンディはそのエメラルドの瞳を輝かせている。その輝きは、満天の星空にも、そして、その星空にも負けないほど輝いている三日月よりもずっと美しかった。
漆黒の海、宇宙を連想させる星の海のその下、一隻のクルーザーは、水面に浮かぶ木の葉の如く、ゆらりゆらりと静かに揺れていた。
そこは二人だけの空間だった。他にはなにもありはしない。存在するのは、星と月の間接照明と、心地よいばかりの波音のバックミュージック。
そして、濃霧――
「！？」
空も、海も、そして、二人の姿すらも、突然の濃霧が覆い隠してしまった。
急に右も左も分からなくなった二人は不安に陥り、抱き合うような形で、相手の存在を確かめた。その際、シンディは手にしていたシャンパングラスをつい落としてしまった。
足元で砕けるシャンパングラス。しかし、その存在も音も、突如として忍び寄ってきた濃霧により、かき消されてしまった。
濃霧……。
いまは深夜。そして、この濃い霧の中だ。視界はほぼ皆無な状態

のはずなのに、何故か妙に明るい。
濃霧の中にいるということが、二人には分かっていた。見えているのだ。本来であれば、真の闇の中だというのに。
気がつけば、お互いの姿もちゃんと見えている。どうも、おかしい。
二人がそのように疑問を抱いた、そのときだった。
濃霧の彼方に、二人は巨大な影を見た。影だ。大きな、大きな、影。その途端、衝撃が走った。二人は荒々しく椅子から放り出されてしまった。
いまのはなんだ！？　船が何かにぶつかった！？
混乱する二人。
すると、それは聞こえてきた。
音だ。音がする。
ギィ……ギィ……――という、静かな鈍い音。
そう、例えるならば、古い木材がしなるような音……。
「キャァァァァァァァ――ッ！」
悲鳴を上げたのはシンディだった。彼女は、目前に聳え立つ巨大な影に恐怖したのだ。そして、その恐怖を抑えられなかった。
マークは走り出していた。船首から操舵室へと飛び込み、すぐさまクルーザーをバックさせて、濃霧の中に現れた、その巨大な影から遠ざかるべく、逃げたのだ。
徐々に遠ざかる巨大な影。そして、遠ざかってゆく不気味な音……。

『ヒィイイイイイ――ッ』

どこからともなく、それは聞こえてきた。
悲鳴！？
マークはもしやと、船首にいるはずのシンディを見やった。しかし、彼女はそこにいた。いまの悲鳴は自分ではないと、首を振るこ

とで意思表示している。
「あれは、船……！？」
シンディは、再び、正面を見据えて、濃霧の中に浮かび上がる影を見つめた。そして、自分に確認するように小さく呟いた。その巨大な影のうすぼんやりとした輪郭を見やり。
クルーザーはエンジン音をふかし、濃霧を突っ切った。そして、ついに抜けた。
満天の星空の下、漆黒の海の上に帰ってきたのだ。
クルーザーのライトが遠ざかる濃霧を照らしていた。そして、遠ざかる巨大な影を。
まるで、意志を持って動いているかのような濃霧を、マークとシンディの二人は、クルーザーの船首にて佇み、途方に暮れるように、ただ見つめるばかりだった。

濃霧は、まさに霧隠れのように、ふっと、水平線の彼方に消えてしまった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4522ba/

あくまでもクリスチャン　デーモンシップ

2012年1月12日06時07分発行